

島の伝統芸能を後世へ

発祥地との交流による伝承方法の模索と実践案

高橋 鵬成

一 団体名 一 礼文町四ヶ散米舞行列保存会（北海道礼文町）

一 事業名 一 ふるさとの伝統芸能保存継承推進事業

一 豊かな歴史を持つ礼文島 一

礼文島は日本海上に位置するわが国最北部の離島です。全島が礼文町に属し、人口は二三四八人（令和四年八月現在）。本土最北端の北海道稚内市から西に約六〇キロメートル、フェリーで二時間弱を要し、南東には約一〇キロメートル離れて利尻島があります。最高点は礼文岳の四九〇メートル、南北約二〇キロメートル、東西約八キロメートルと、利尻山を有する利尻島と比

べると平らで細長く、島の北部には東西に岬を持つ船泊湾があります。島の形は、カニの爪やサソリの姿に例えられます。おもな産業は水産業と観光業で、高級の出汁用コンブやウニの産地として、また、レブニアツモリソウなど特徴的な高山・亜高山植物を目的に、多くの人々が訪れる「花の浮島」として有名です。

一方で、礼文島の歴史についてはあまり知られていません。例えば島北部の船泊遺跡の発掘結果から約三五〇〇



年前には最北の縄文集落があったことが分かっています。また、本州の古代（古墳から平安時代）と同時期にはオホーツク文化が栄え、豊富な海産資源を糧に北海道本島やサハリン島と行き来する人々がいたようです。幕末からはニシン漁のために、北海道南部や東北方北部から日本海側、北陸地方からの移住者が増え、彼らが定住するに従って町が形成されてゆき、文化面でもさまざまな物が持ち込まれました。

このような礼文島の特徴や成り立ち

を伝えるものとして、希少な植物、歴史や文化を物語る資料などは国や道、町の各種文化財に指定されています。そのうちの一つが礼文島南部の嚴島神社に伝わる町指定無形民俗文化財の「四ヶ散米舞行列」です。

島で唯一の 町指定無形民俗文化財

四ヶ散米舞行列は、江戸時代前期に松前藩の公式行事とされた松前神楽の一つ「四ヶ散米舞」を、北海道南部の福島町で行列化したもので、道南から日本海側を中心に現在でも各地の祭礼で行なわれています。基となった舞が蝦夷地平定を祈念したものであることから、行列は、神輿渡御（神輿が進む際）の露払いの役割を担います。地域によって担い手の人数や順番には違いがありますが、行列は基本的に一四人とされ、礼文島の場合は先頭から、杵一名、

薙刀一名、弓四名、太刀四名、剣四名の順となっています。

発祥地・福島町にある福島大神宮の宮司は、代々松前藩に仕えた神職の家系である常磐井家が務めており、同家の者が道内各地の神社に赴任することで四ヶ散米舞行列を伝えました。離島では奥尻島、利尻島などで事例が確認されています。礼文島へは、利尻島の常磐井家から嚴島神社の神職として着任した常磐井武四郎氏によって、同じく松前藩の伝統芸能である奴行列や荒馬踊とともに伝えられました。伝来した年は大正一一年とも昭和五年とも言われ、定かではありませんが、少なくとも写真などから昭和十年代には実施されていたことが分かっています。

荒馬踊は昭和二十年代に、奴行列は三十年代に伝承が途絶えますが、四ヶ散米舞行列のみが小学校高学年程度の児童が担う地域行事として、現在まで伝えられています。しかしながらこの

四ヶ散米舞行列も、少子高齢化と人口減少による伝承の危機に見舞われています。祭祀の担い手を確保するため、嚴島神社周辺に住む男児に限定していた参加者を、対象地域を拡大し、平成からは女兒も参加できるようにするなど、現在では島南部の小学校に通う五・六年生の希望者全員が参加できるものになっています。

福島町保存会との意見交換

伝承初期は、常磐井武四郎氏が行列の指導に当たっていました。その後、地域の有志が指導を行なうようになりませんが、人口減少にともなう参加者の減少、所作の単純化、笛の断絶など伝承が危ぶまれる状況になっていきました。しかし、平成の初め頃、武四郎氏から直接指導を受けた人物が帰郷したことで伝承の機運が再燃、平成二四年には「礼文町四ヶ散米舞行列保存会」が結成

され、同二六年には町で初めての無形民俗文化財に指定されました。

保存会では、伝承すべき内容や手法に対して不安を抱えており、その解消と伝承自体を盛り上げるためのヒントを得るため、発祥地・福島町への視察を計画・実行しました。

計画当初は「福島町祭祀行列保存会」が伝承を担う「四ヶ散米行列」の練習と福島大神宮での祭祀の視察を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大



令和4年7月15日に執り行なわれた四ヶ散米舞行列。

防止のため令和三年度の行列が中止となり、変更を余儀なくされました。福島町の行列は、礼文町と異なり大人が中心で執り行なわれます。そこで、行列保存会に加え同町の「白符荒馬踊保存会」との意見交換会も実施すること

にしました。白符荒馬踊は子どもが参加する伝統芸能で、かつての礼文島の荒馬踊の源流と考えられています。意見交換会では、両保存会ともに伝承者の確保など困難に直面しながらも、

両保存会ともに伝承者の確保など困難に直面しながらも、



視察成果報告会の模様。

地域の理解と協力を得ながら伝承に努めていると伺い、勇気づけられました。また、礼文町の四ヶ散米舞行列の形態が、福島町のそれとわずかな差異しかなく、大きく簡略化・形骸化したものではないことを確認できました。

この視察の成果を礼文島の保存会関係者や地域住民と共有するための報告会は、大人数での開催が許されない状況下ながらも、四ヶ散米舞行列と関係の深い神社の役員や氏子に限定した形



蔵島神社境内での練習風景。

で実施しました。

地域が誇る芸能を より良い姿で後世へ

報告会では、九〇年の時を経てなお発祥地から所作が大きく崩れることなく伝承が続いていることが驚きをもって受け入れられ、礼文島での伝承内容に誇りを持ち、より素晴らしい形で後

世へ伝えようという機運の高まりにつながりました。また、福島町を見習い、礼文島でも装束の充実や現在テープで再生している笛演奏を復活させてはどうか、といった意見もあがりました。

これらを受け令和四年度は、前年度までは各自の運動靴だった装束の足元を福島町と同様に地下足袋で統一しました。七月一五日には、規模は縮小したものの、約一キロメートルの道すが

ら大勢の観覧の下で行列を実施することができました。統一した装束での行列に、地域からの温かい拍手や肯定的な意見が寄せられ、今後の保存会活動に向けて弾みがついたように思います。来年度以降は視察で得た情報や録音した音源をもとに、笛演奏の復活にも取り組んでいく計画です。地域が誇る伝統芸能として、より良い姿で未来に伝えていけるよう活動していきます。

離島人材育成基金助成事業 事務局より

四ヶ散米舞行列は、現在、礼文町が指定する唯一の無形民俗文化財です。そのルーツをたどり、そこでの継承活動に取り組まれている方々との交流を通して、少子高齢化や人口減少による担い手不足のため伝承が危ぶまれている四ヶ散米舞行列の現状の打破を図る本事業には、大きな意義があるのではないかと感じました。

視察先との意見交換会の議事録からは、主目的である伝承されてきた内容の確認に留まらず、後世に伝えていくべき事柄、その練習方法や担い手の集め方、事業予算の確保など、継続的に運営するために必要となる具体的な質疑が行なわれるなど、非常に有意義な時間だったことが伝わってきます。

本事業は申請・視察・報告にいたるまで、全体を通して堅実に実施されました。礼文町四ヶ散米舞行列保存会が、宮司・経営者・公務員・町議会議員など多様な人材により構成されながらも、目的を明確に共有した上で活動されているからだと思います。行列の担い手や指導者の確保という課題を本保存会がどのように突破していくか、同様の問題を抱える他の離島地域にとっても注目に値する取り組みです。



※QRコードから平成28年に実施した四ヶ散米舞行列の模様をご覧ください。

高橋 鵬成 (たかはし ともなり)

礼文町四ヶ散米舞行列保存会会員。平成2年栃木県生まれ。大学院の調査で礼文島に通ううちに虜となり、現在は礼文町教育委員会学芸員として、島の歴史や文化を伝えている。専門は、動物考古学・オホーツク文化。